

戦略で探る 近江の城

安土城

信長のイノベーション

滋賀県立大学教授 中井 均

織田信長は天正4(1576)年に蒲生郡安土の地に新たな城を築きます。日本でもっとも有名な城のひとつに数えられる安土城です。この信長による安土築城にはそれまでの山城にはない極めて注目される施設が導入されます。それは高い石垣と金箔瓦と天主という三つの要素に要約することができます。

石垣は安土築城以前から日本の城郭に採り入れられています。本格的な高石垣は安土城が最初となります。従来は近江の石工が動員されたと言われていましたが、同じ近江の石工が築いた観音寺城では矢穴やあなを用いて割った石材を石垣に用いていますが、安土城の石垣石材には一切矢穴が認められません。近年安土城以前に信長が築いた岐阜城、小牧山城で発掘調査が行われ、すでに小牧山築城段階から石垣を用いた城造りの行われていたことが明らかとなっています。こうした築城に関わった石工たちがそのまま安土城にも動員されたものと考えられます。

次に瓦ですが、安土城以前に石垣を導入した観音寺城や小谷城で瓦はまったく出土しておらず、石垣造りの城ではあったものの、建物は板葺き屋根であったと考えられます。一方、畿内の城郭きさへじょうで私部城や田辺城からは安土築城以前から瓦を葺いた建物の存在が確認されています。しかしこうした瓦を葺く城からは石垣が認められません。畿内先進地という立地から古代以来の瓦工がいたため、瓦を城郭に導入したのと考えられます。

ところが安土築城では、信長は瓦を葺くために唐人からじんいつかん一観という人物に依頼し、唐様に仰せつけたと記されています。中国人とおぼしき人物を監督とし、中国風の瓦を用いたとはいかにも信長らしいのですが、実際に用いられている瓦は日本の瓦そのものです。なお、瓦は奈良衆が焼いており、古代以来の瓦生産地の職人たちが動員されていました。



さらにこの瓦は本格的に城郭に用いられた最初の事例なのですが、瓦先端の紋様部分には金箔が施されました。これは城郭が軍事的施設というだけでなく、天下統一を目指す信長のシンボルとして築かれたことを端的に示しています。

もうひとつ、安土城でもっとも注目されるのが天主の造営です。安土山の最高所に五重七階の高層建築が建てられたのです。城下からはそれまで見たこともない、屋根が金色に輝く高層建築がそびえ、人々は天下人としての信長をそこに見ることとなりました。天主はまさに信長の天下統一の具現化したシンボルだったのです。

天主は天正7(1579)年に完成しますが、わずかその3年後に焼失してしまいます。図面も一切残されておらず、具体的にどのような建物が建っていたのかは謎ですが、内部については文書が残されており、障壁画は狩野永徳が描き、金具なども京都の一流の職人が腕ふるを揮ったと記されています。

このように安土城はそれまでの戦国時代の城とはまったく異なり、日本城郭の革命的变化と捉えることができます。以後の日本の城は石垣、瓦、天守を用いるようになります。まさに安土城は信長のイノベーションそのものだったのです。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。